

第1章

津山市の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

津山市は、中国地方の内陸部、岡山県の北東部に位置し、北は中国山地、南は中部吉備高原に接している。県都岡山市から約 60km、出雲市から約 160km、姫路市から約 90km の位置にある。

この距離は、道路網が整備され自動車交通の発達した今日でも、相当の時間距離であるが、そのことが逆に、出雲往来をはじめとした陸上交通の要衝としての発展を促し、津山市固有の歴史と文化を生み、現在の人口約 10 万人という、中国地方内陸部屈指の都市として発展した要因となった。

また、面積は 506.33km² で、これは県土面積 7114.32km² の約 7.1% を占めている。



津山市位置図

(2) 地形・地質

津山市は、市街地から中国山地まで約 1,000m の標高差を有しており、市街地の中央部を吉井川が貫流している。北部の鳥取県との県境をなす標高 1,000 ~ 1,200m の南面傾斜地は、中国山地の一角を形成している。また南部は、「津山盆地」と言われ、標高 100 ~ 200m の平坦地が広がっている。市街地からはどの方向を眺めても背景に山並が連なり、中国山系だけでなく、市街地との間に小丘や田園をもつ緑の二重構造に特徴がある。



岡山県の中の津山市位置図

さらに市街地からの景観は、宅地内や街路樹等の近景の緑が加わり、緑の三重構造として映し出される。

中心市街地を吉井川が貫流する他、宮川、加茂川、皿川等が市内を流れ、水際景観はとても豊かである。また、盆地の中の谷あいや台地に 250 あまりのため池があり、盆地内の多くの小丘や木立とともに、多様な景観を形成し豊かな自然環境を醸し出している。

このような眺望が、360 度にわたり日常的に展開していることが、他都市にはみられない極めて「津山らしい」景観を形成している。

津山の気候は、夏は暑く、冬は冷え込み、一日のうちでも昼と夜の温度差が大きい盆地特有の気候である。曇りの日は、四季を通じ百数十日もある。

また、初冬を中心に霧が多く発生し、晴れの日でも、午前中霧の立ちこめる日が100日ほどもあり、津山の一つの風物詩となっている。

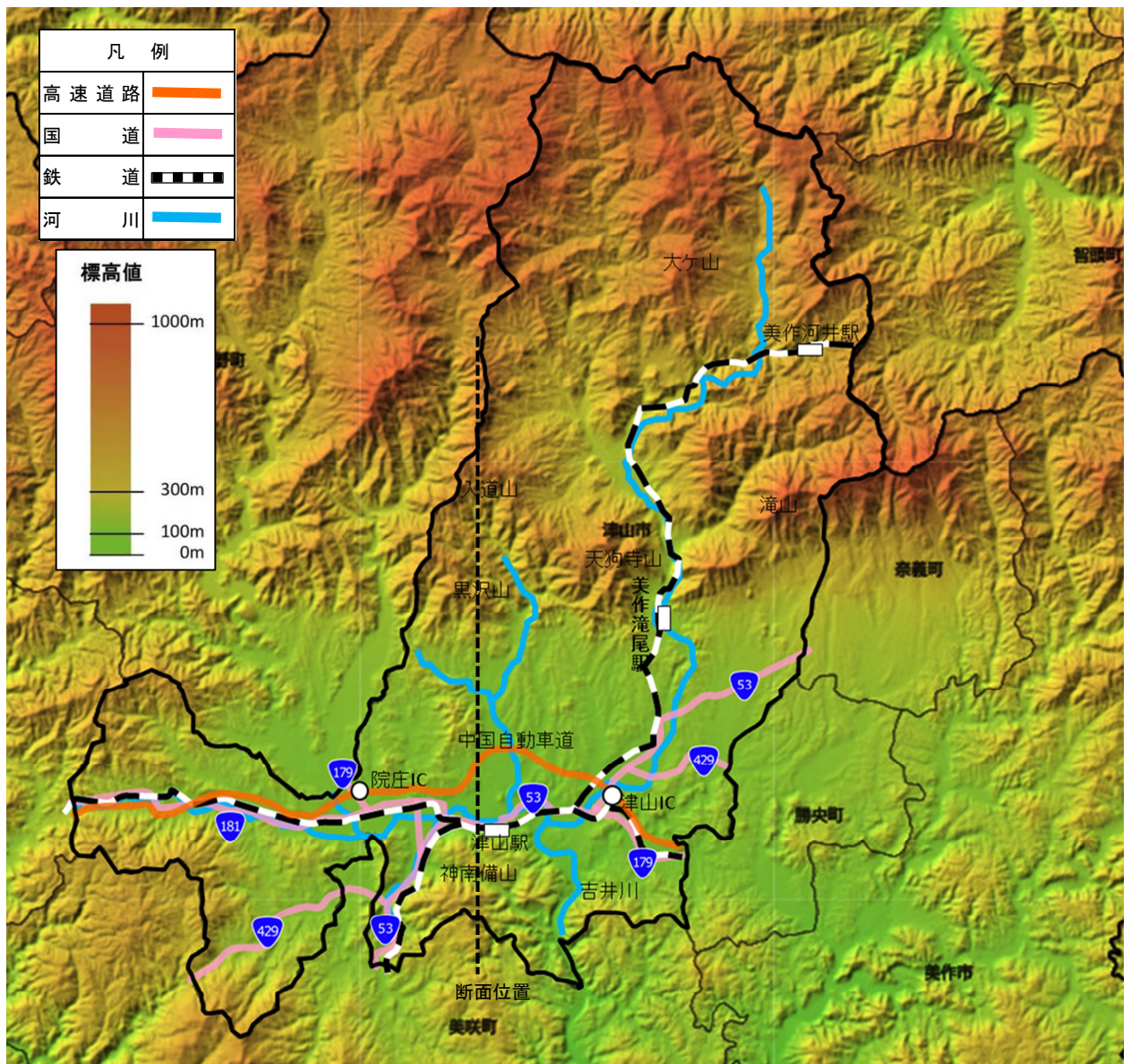
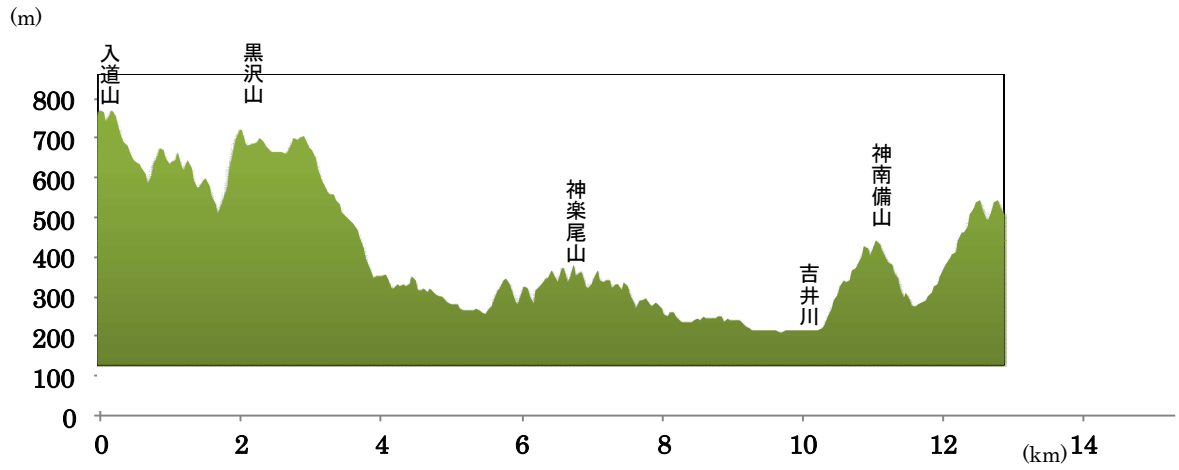
なお、盆地から見上げる山地最高峰の那岐山（1,240m）は、地域住民のシンボルで、歌にも詠まれ幾多の伝説を生んでいる。このような豊かな自然を保全するために、津山市環境保全条例に基き、黒沢山地域を自然環境保護地区、神楽尾山、神南備山地域を郷土自然保護地区に指定している。



吉井川河岸緑地



中国山地の山並みと丘陵地



津山市の地形の概要

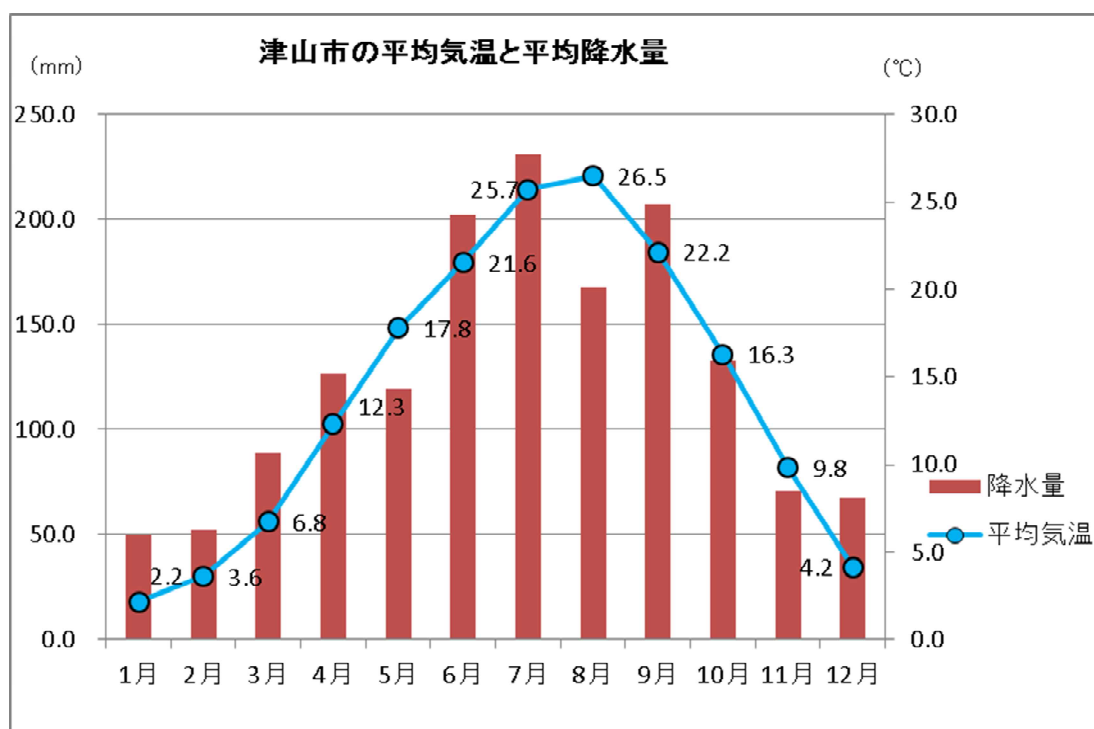
国土地理院 地理院地図より

(3) 気象

津山市は、瀬戸内海から 50km の内陸部にあり、標高 100～200m で、気候は盆地性の特色を示す。年間を通じて霧がよく発生し、特に冬に多い。

年間の平均気温は 13℃～14℃、平均降水量は 1,518.1mm である。夏は 30℃を超える日もあり、冬は低温になり雪が降る日もある。

北部では、15cm 程度積もることがあるが、中心部では、ほとんど積もることはない。



気象庁のデータ (H22～H29) を基に作成

2. 社会的環境

(1) 市の沿革

昭和 4 年 (1929) の市制施行後は、市域を拡大しつつ、着実に発展してきた。しかし、昭和 30 年代の高度経済成長期に入り、人口の流出が続き、過疎化が進行した。

昭和 50 年 (1975) に開通した中国縦貫自動車道は、本市に大きな影響をもたらし、工業団地への企業立地、商業の活発化などにより、人口も増加を続けてきた。

平成 17 年 (2005) には、津山市、加茂町、阿波村、勝北町及び久米町の合併により、新津山市が発足した。

(2) 人口動態

本市の総人口は、昭和50年の中国縦貫自動車道開通以降、増加が続いていたが、平成7年(1995)の113,617人をピークに減少傾向に転じ、令和2年には99,937人となった。

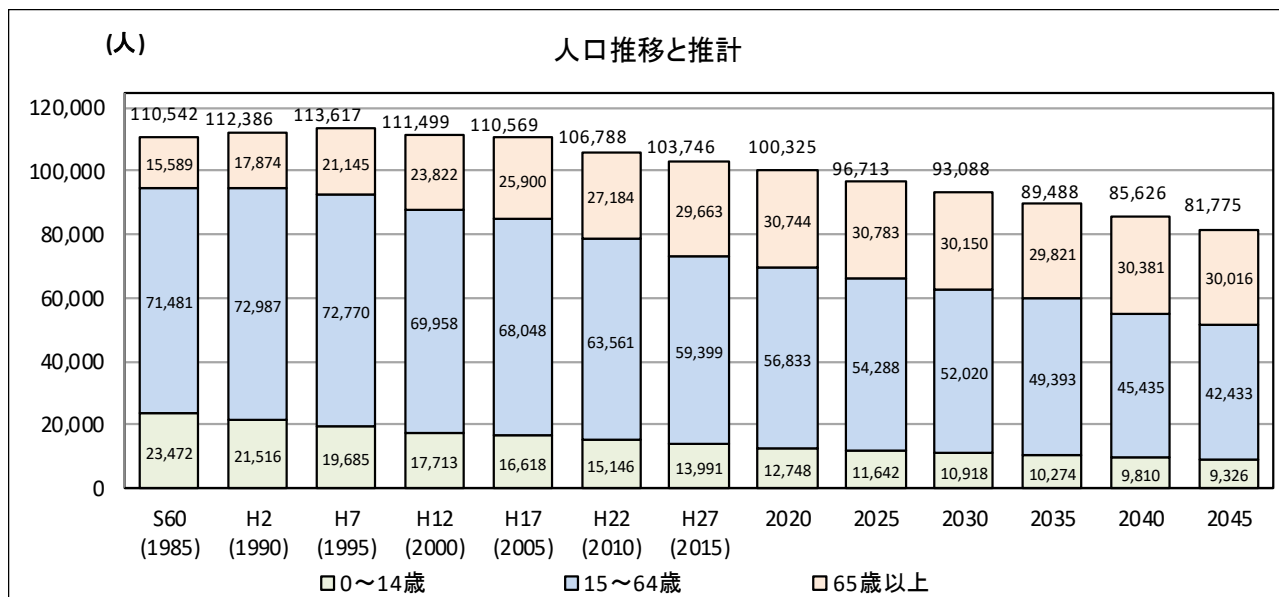
国立社会保障・人口問題研究所による推計(平成30年3月公表)では、2040年の人口は85,626人と推計されている。

年齢別人口を見ると、年少人口(0～14歳)は昭和60年(1985)以降、また生産年齢人口(15～64歳)は平成2年(1990)以降、減少が続いている。

一方、高齢人口(65歳以上)は一貫して増加しており、今後は、2025年頃まで増加し、その後減少に転ずるものと推計されている。

年齢別		S60 (1985)	H2 (1990)	H7 (1995)	H12 (2000)	H17 (2005)	H22 (2010)	H27 (2015)	2020	2025	2030	2035	2040	2045
0～14歳	人口(人)	23,472	21,516	19,685	17,713	16,618	15,146	13,991	12,748	11,642	10,918	10,274	9,810	9,326
	構成比	21.2%	19.1%	17.3%	15.9%	15.0%	14.2%	13.5%	12.7%	12.0%	11.7%	11.5%	11.5%	11.4%
15～64歳	人口(人)	71,481	72,987	72,770	69,958	68,048	63,561	59,399	56,833	54,288	52,020	49,393	45,435	42,433
	構成比	64.7%	64.9%	64.0%	62.7%	61.5%	59.5%	57.3%	56.6%	56.1%	55.9%	55.2%	53.1%	51.9%
65歳以上	人口(人)	15,589	17,874	21,145	23,822	25,900	27,184	29,663	30,744	30,783	30,150	29,821	30,381	30,016
	構成比	14.1%	15.9%	18.6%	21.4%	23.4%	25.5%	28.6%	30.6%	31.8%	32.4%	33.3%	35.5%	36.7%
総数(人)		110,542	112,386	113,617	111,499	110,569	106,788	103,746	100,325	96,713	93,088	89,488	85,626	81,775

資料：国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所（平成30年3月公表）

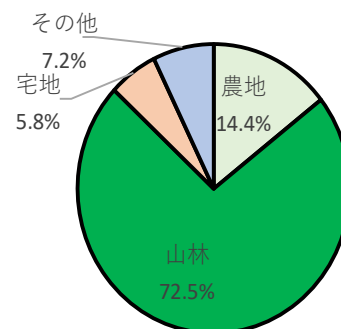


(3) 地勢

地目別面積を見ると、山林が全体の72.5%を占め、その他は、農地14.4%、宅地5.8%などとなっている。

津山市の土地利用現況

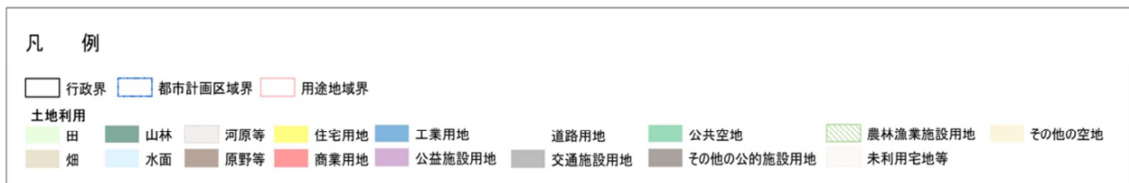
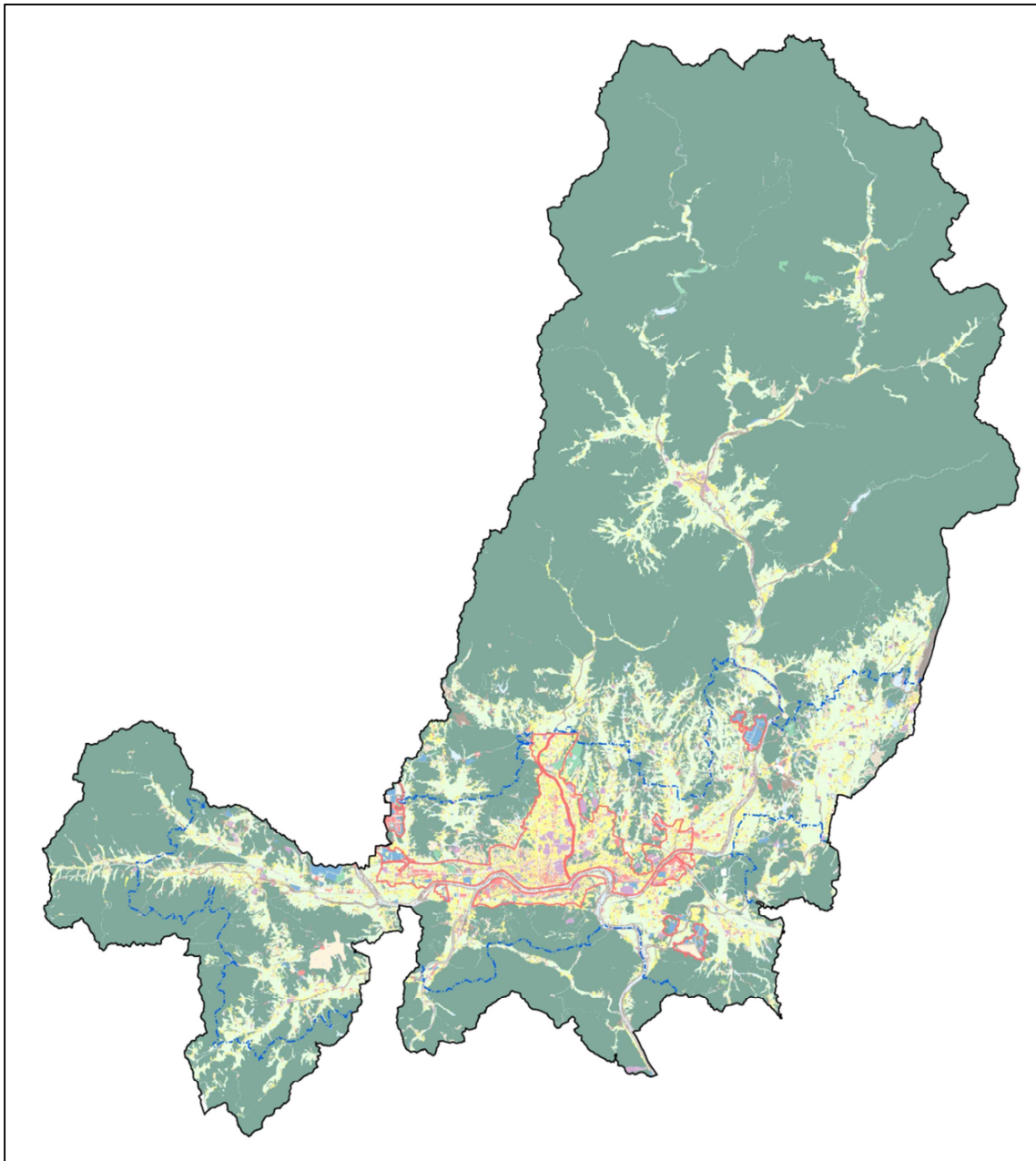
津山市(全域)		面積(ha)	割合
農地		7,316.1	14.4%
山林		36,705.0	72.5%
宅地	住宅用地	1,926.4	5.8%
	商業用地	367.5	
	工業用地	265.1	
	公益施設用地	389.2	
その他	公共空地	231.7	7.2%
	水面	741.4	
	原野等	920.5	
	その他空地	303.0	
地区合計		50,633.0	100.0%



※農地は田と畑の合計、その他空地は未利用宅地等とその他空地の合計、その他は河原等と道路用地、交通施設用地、その他公的施設用地、農林漁業施設用地の合計

資料：都市計画基礎調査（平成30年（2018）3月）

津山市の土地利用図



資料：都市計画基礎調査（平成 30 年（2018）3 月）

(4) 産業

産業別就業者数は、平成7年(1995)の56,613人をピークに減少傾向に転じていたが、平成27年(2015)には再び増加している。

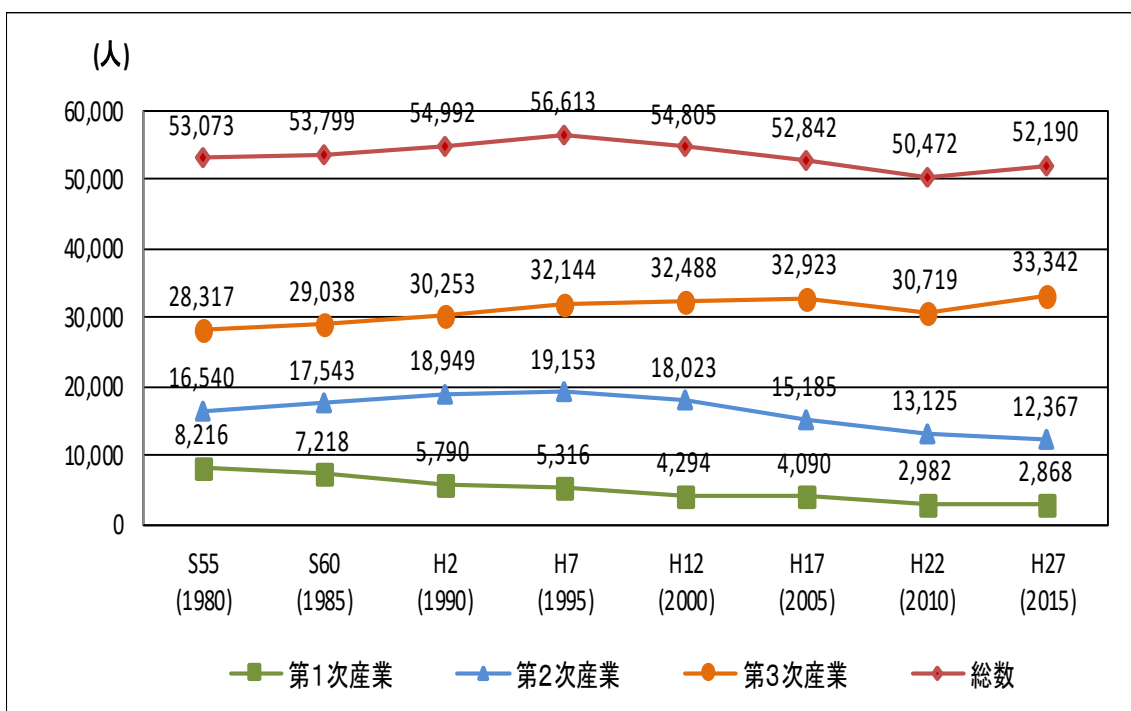
第1次産業及び第2次産業は減少が続いており、平成27年(2015)と昭和55年(1980)を比べると第1次産業は約65%減少し、第2次産業は約25%減少している。第3次産業は、増加傾向にある。

今後も後継者不足等により、第1次産業就業者の減少が懸念される。また、第2次産業についても、人口減少や産業構造の変化等により、就業者の減少が予想される。

産業別就業人口の推移

	就業人口							
	S55 (1980)	S60 (1985)	H2 (1990)	H7 (1995)	H12 (2000)	H17 (2005)	H22 (2010)	H27 (2015)
就業者総数	53,073人	53,799人	54,992人	56,613人	54,805人	52,842人	50,472人	52,190人
第1次産業	8,216人	7,218人	5,790人	5,316人	4,294人	4,090人	2,982人	2,868人
構成比	15.5%	13.4%	10.5%	9.4%	7.8%	7.7%	5.9%	5.5%
第2次産業	16,540人	17,543人	18,949人	19,153人	18,023人	15,185人	13,125人	12,367人
構成比	31.2%	32.6%	34.5%	33.8%	32.9%	28.7%	26.0%	23.7%
第3次産業	28,317人	29,038人	30,253人	32,144人	32,488人	32,923人	30,719人	33,342人
構成比	53.4%	54.0%	55.0%	56.8%	59.3%	62.3%	60.9%	63.9%

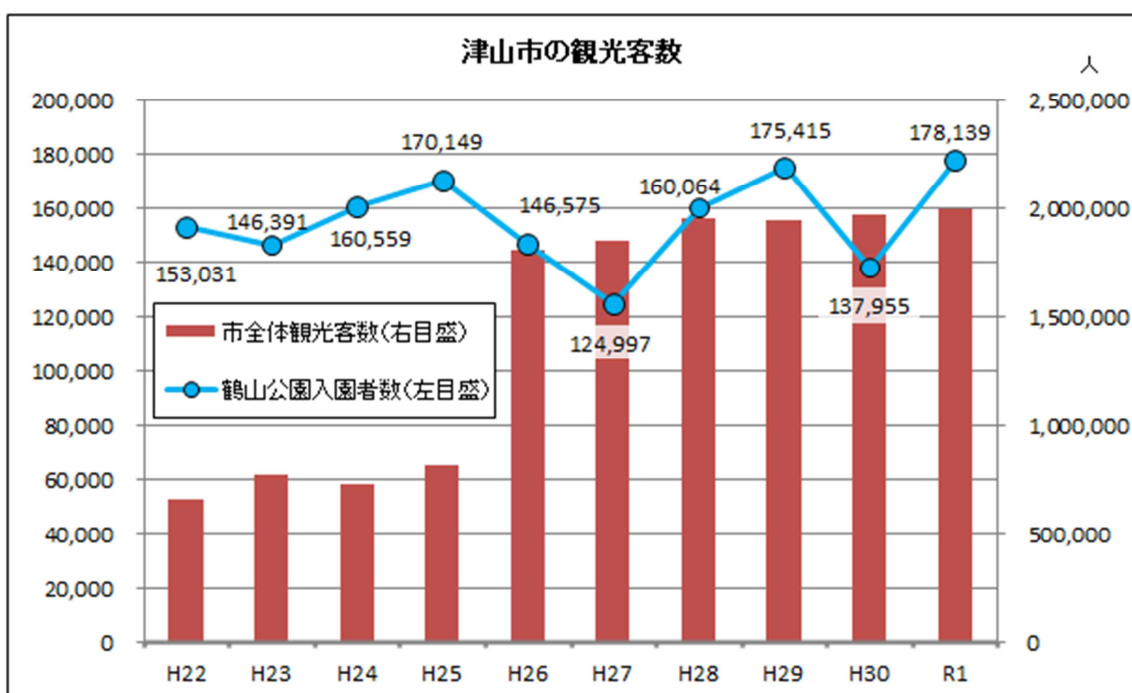
※総数には分類不能の産業を含む 資料：国勢調査



(5) 観光

津山市は、古代から一貫して、岡山県北美作地方の拠点として、政治・経済・文化の中心的役割を担ってきた。また、旧津山藩の城下町から発展した現在も、津山城を中心に昔日の面影を残しており、津山城（鶴山公園）や旧津山藩別邸庭園（衆楽園）を始め、津山市城東・城西伝統的建造物群保存地区や旧津山扇形機関車庫や転車台など豊富な歴史と文化を感じる観光資源を有している。

平成 25 年 9 月 25 日に津山市議会において観光立市宣言が決議され、豊かな自然と歴史、魅力ある観光資源を活かした歴史と文化が薫る都市として観光立市の実現に取り組んでいる。

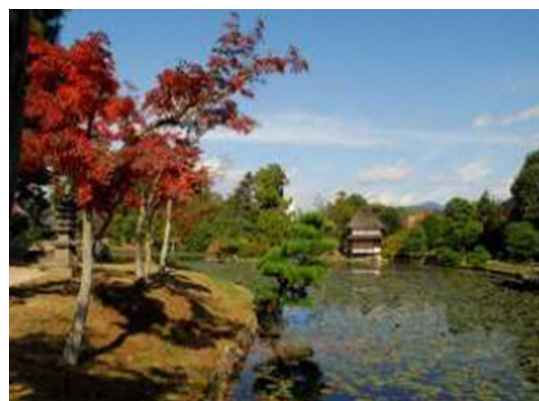


平成 26 年から岡山県観光客動態調査は国の「観光入込客統計に関する共通基準」による算定方法に変更している。

資料：岡山県観光客動態調査



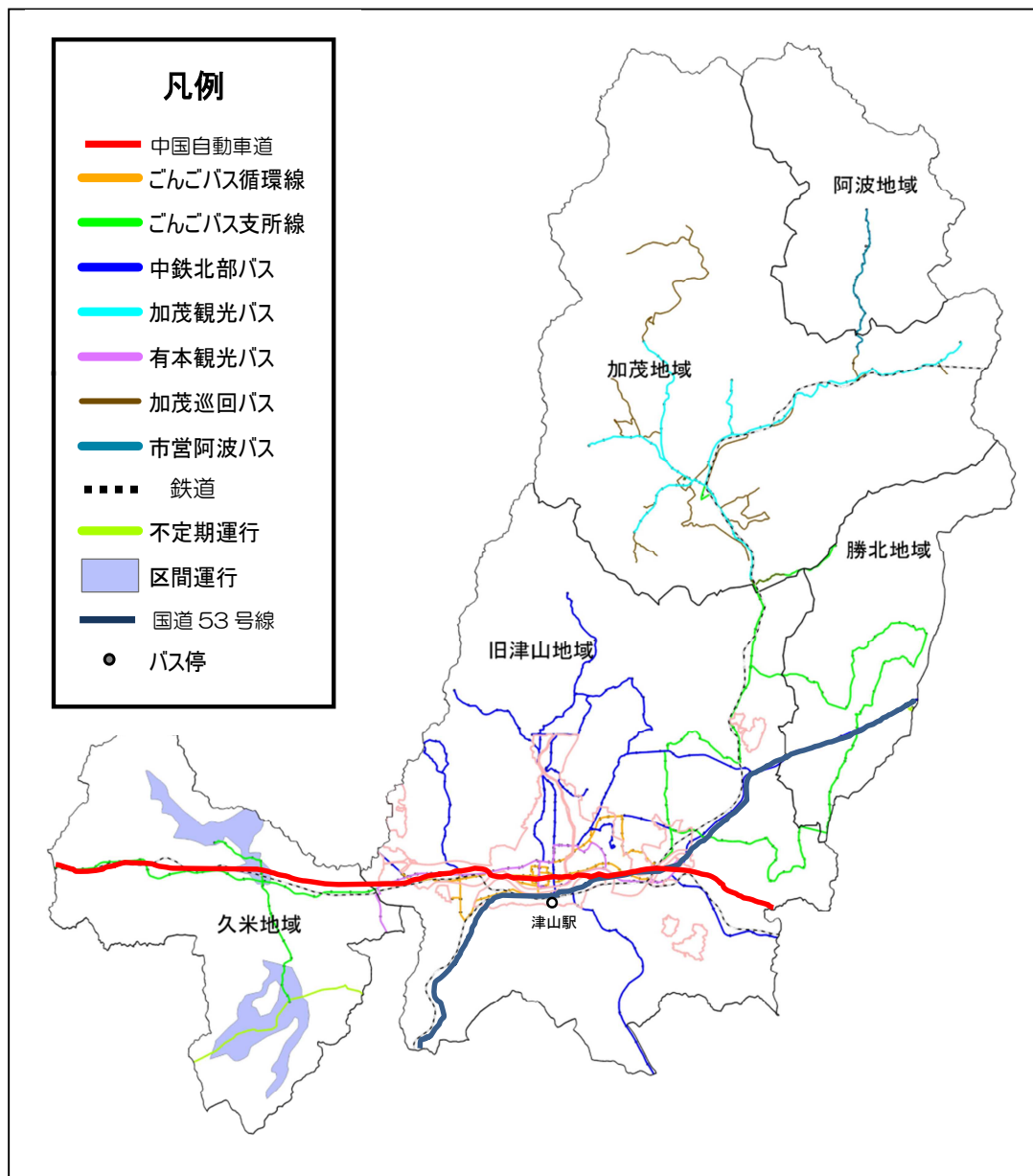
津山城（鶴山公園）



旧津山藩別邸庭園（衆楽園）

(6) 交通

本市の道路網として、大阪、九州方面を結ぶ中国自動車道が市の南部を縦断しており、津山インターチェンジと院庄^{いんのしょう}インターチェンジの二つのインターチェンジを有する。また、岡山方面と鳥取方面を結ぶ国道53号線が市の南から北東に向けて通じており、幹線道路となっている。また、公共交通網は、鉄道及び路線バス、タクシーで構成されている。鉄道は津山線、姫新線、因美線の3路線があり、津山駅はJR各線や路線バスが乗入れる主要な交通結節点となっている。路線バスは、津山駅を中心に、市内各地へ放射状に連絡している。タクシーは、13社150台あまりで、鉄道や路線バスを補完する役割を担っている。



3 歴史的環境

(1) 津山市の歴史

①地質時代

今から約 1600 万年前、津山近辺は海であった。当時は新生代第 3 紀中新世で、日本列島がユーラシア大陸から分離し、西日本一帯は「第 1 瀬戸内海（古瀬戸内）」と呼ばれる浅瀬の海が広がる亜熱帯の気候であった。クジラやイルカの他、牡蠣等の化石が出土しており、豊かな海であったことがわかる。



津山で出土した牡蠣の化石



津山で出土したイルカの化石

この時期に津山で生息していた生物のうち、特異なものが「パレオパラドキシア」である。パレオパラドキシアは哺乳類東柱目^{そくちゅうもく}パレオパラドキシア科パレオパラドキシア・タバタアイに分類される。近い仲間として同目のデスモスチルス（デスモス=東、スチルス=柱）がいる。これらは 1500 万年前の北大西洋沿岸

にのみ生息していたと考えられ、日本のほか、アメリカ・カナダの西海岸でしか発見されていない。東柱目の名は臼歯^{きゅうし}が鉛筆位の柱を束ねたような形状からつけられた。東柱目の特徴は、4 本の足が、体の横に張り出していることである。これは大型の哺乳類には珍しく、強い風や水の流れなどに対して体の安定性に優れているが、大型化すればするほど、体を支えたり、歩いたりするのに効率が悪くなるため、効率よりも安定性が重視される場所に住んでいたということが推測される。脳^{なん}の化石の分析から、嗅覚が発達していたことが分かり、これは主な生活場所が水中ではなかったことを示している。その他、三叉神経^{さんさ}も発達しており、象の鼻や海獣類のひげのようなものがあつたことが推測されるが、鼻骨の形状から長い鼻を持っていたとは考えられず、ジュゴンなどの海獣類のように口の周辺にびっしりとひげが生えており、そのひげを利用して主に、海草や海藻を食べていたと考えられる。カバのように見えるが、歯の形状などからは象に近い種であると考えられる。



パレオパラドキシア（複製）

1400 万年～1000 万年前に第 1 瀬戸内海は火山活動の活発化により陸地化し、これ以後津山は海から遠い、内陸の山間地となった。

②先史時代

津山市内には、原始・古代より人々の生活した痕跡が多く残っている。一番古い痕跡は旧石器時代で、ナイフ形石器が、天神原遺跡てんじんばらや大開遺跡おおびらきなど丘陵部の遺跡で出土している。

縄文時代には、津山に人々が定住し始める。西奥田遺跡では生活の痕跡である住居跡が発見され、堀坂星ヶ坪遺跡ほりさかほしがつぼ、堀坂宮ノ前遺跡みやのまえ、堀坂田中遺跡なかになどでは多くの土器が出土した。この時期は、狩猟や採集による生活が主で、動物を捕まえるための「落とし穴」が多いのも山間部の特徴である。

弥生時代には稲作が始まり、県指定文化財（史跡）の沼遺跡（沼弥生住居址群）のように、住居や倉庫などで構成される集落が、市内の丘陵の各所に多数営まれるようになる。

弥生時代後期の後半以降には、山陰地域の特徴をもった土器が出土し、地域間の交流が盛ん



弥生住居跡

に行われていたことがわかる。土器以外にも、銅鐸などの青銅器、ガラス製や碧玉製などの玉類が出土し、他地域との交流が窺える。特に津山郷土博物館所蔵の袈裟襷紋銅鐸たすきもんどうたくは島根県の加茂岩倉遺跡かもいわくらで出土した39口の銅鐸の一つと同じ鑄型で製作されたことがわかっている。



袈裟襷紋銅鐸

古墳時代は、前期・中期・後期に分けられ、吉井川を見下ろす丘陵部に美作地方最古の前方後円墳である日上天王山古墳かみ（県指定史跡）が築造される。その後、美和山古墳群みわやま（史跡）、油木北奥の前古墳ゆききた（市指定史跡）、高野山西正仙塚古墳たかのやまにししょうせんづか（市指定史跡）など多くの前方後円墳や円墳などが築かれるようになる。

後期古墳に特徴的なものとして、美作地方を中心に出土する「陶棺」と呼ばれる棺桶がある。また、後期の終わりごろには製鉄に関連する遺跡が顕著になる。



陶棺

陶棺は関東から九州地方にかけて出土し、岡山県内で全国の77%、津山を含む美作地方だけで全国の50%以上の出土を見る。岡山県内以外では畿内地方での出土例が多いが、美作地方を特徴付ける遺物である。

③古代

美作国は和銅6年(713)に備前国北部6郡を割いて設置された。『続日本紀』(延暦16年(797)成立)によると「元明天皇 和銅六年 癸丑 四月三日 割備前六郡 始置美作国」とあり、初代の美作守に備前介上毛野堅身が任命された。この6郡は「英田、勝田、



国府跡出土瓦

とまだ 苦田、久米、大庭、真島」で、現在の岡山県津山市、久米郡、英田郡、真庭市、真庭郡及び岡山市・兵庫県佐用町の一部である。美作国府は総社地内に置かれ、発掘調査で堀や溝によって囲まれた中に政庁跡と考えられる建物があったことが確認されている。



美作国府建物跡

県内の備前・備中・美作の旧国の内、政庁の建物配置等が判明しているのは、美作国だけである。この国府跡からは平城京より出土した瓦と非常によく似た型で制作されたものが出土しており、国府の整備にあたり、畿内より職人集団が派遣されてきたと考えられている。

また、『続日本紀』宝亀6年(755)3月乙未条に「美作・備中・阿波・伊予・土佐大少目(古代四等官制のうち4等官)二員」とあり、本来目1人の派遣であるはずの美作に大少目2名が派遣されていることがわかる。これらのことから美作国が重要視されていたことがうかがえる。



「少目」墨書土師器

天平13年(741)全国に国分寺・国分尼寺を建立する詔が発せられ、美作でも両寺が建立された。現在の津山市国分寺にある美作国分寺跡は発掘調査の結果、南から南門、中門、金堂、講堂が一行に並び、金堂・講堂をつなぐ回廊の南東に塔が位置するという、典型的な国分寺式伽藍配置であったことが明らかになっている。平成16年に国の史跡に指定され、保存整備事業の一環として土地の公有化を進めている。



津山市内出土鉄器

美作地域は「まがね(=鉄)吹く」(『古今和歌集(900年頃成立)』)よりと歌に詠まれるほど、古来より鉄の産地として有名であった。平城京出土の木簡から美作国では税として鉄を納めていたことがわかっている。また平安時代中期に編纂された『和名類聚抄』(930年代成立)には美作の特産品として鉄・銅・木材・紙などが挙げられている。実際に津山市の山間部には大蔵池南(津山市神代)、キナザコ(津山市加茂町黒木)

⑤近世

慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いの後、美作国は岡山藩主小早川秀秋こばやかわひであきの領有するところであったが、慶長7年(1602年)秀秋の死去により廃絶となる。

慶長8年(1603)2月6日、本能寺の変で織田信長を守り戦死した森蘭丸の弟、森忠政ただまさが美作国18万6千5百石の領地を与えられ、吉井川と宮川の合流点を見下ろす鶴山つるやまを城地に選定した。

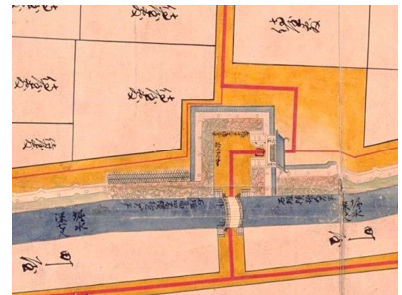
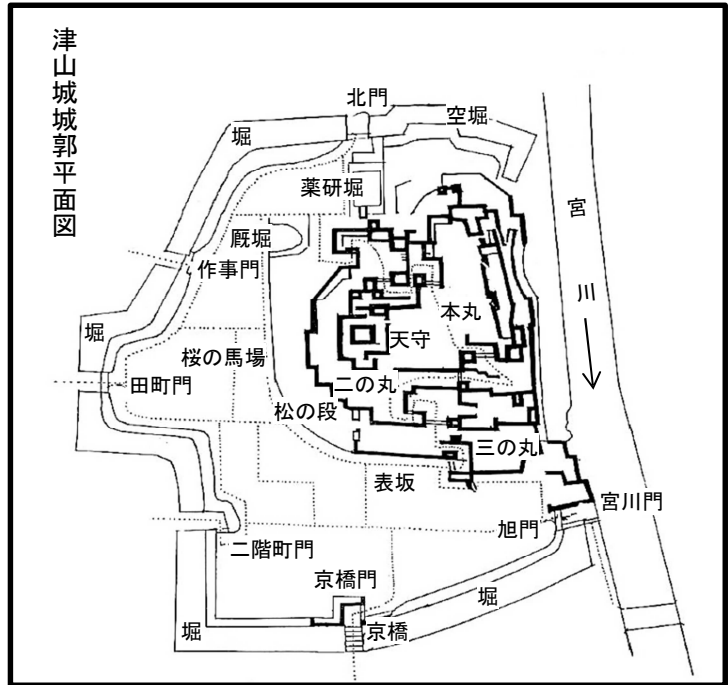
当時、鶴山山上には鶴山八幡宮、南の山腹には妙王院みょうおういん、西の山腹には八子町集落があったが、忠政はこれらを周辺に移転し、翌慶長9年

(1604)、「鶴山」を「津山」と改め築城に着手した。石垣

の石材は、吉井川を挟んで南側の大谷地区一帯及び下流の金屋地区かなやより切り出された。築城工事中、忠政は各地への出役及び大坂への出陣を余儀なくされ、最終的に元和元年(1615)に発布された武家諸法度により足掛け13年に及ぶ築城を終了した。

津山城は、鶴山の山頂を削り本丸を定め、本丸を囲むように二の丸、三の丸を輪郭式に配し、南を大手、北を搦手からめてとした平山城である。三の丸下段の南側、西側、北側を総曲輪そうくるわとし、その外側を土塁と堀で固めている。東側は直下を南北に流れる宮川と急峻な断崖をそのまま防御線に取り込んでいる。宮川は当時の流れを今に引き継いでいる。

堀の南側は、東から宮川門、京橋門、西側には南から二階町門、田町門、作事門、北側には北門の6ヶ所に門が設けられ、城下の中心の京町に面する京橋門を大手口とした。堀の幅は京橋門で27mを測る。



「美作国津山城絵図」(正保3年(1646)、国立公文書館蔵)より京橋門部分拡大

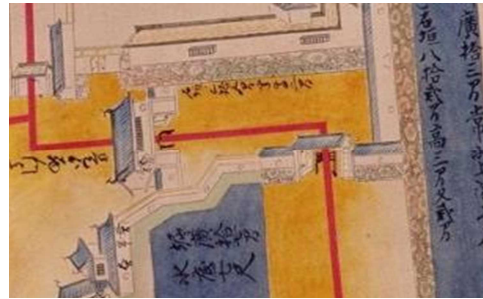


京橋門跡石垣

津山郷土博物館の南側には、唯一外周遺構を確認できる場所として京橋門の遺構（津山城外濠跡（市指定史跡））が残っている。また、宮川門跡の石垣も残されている。



宮川門跡石垣



「美作国津山城絵図」（正保3年（1646）、国立公文書館蔵）より宮川門部分拡大



復元された備中櫓

天守は5層で、高さは22m、天守台石垣を含めた高さは26mにも達する。

本丸は、櫓31棟、門15棟を連ね、その内側に御殿を配するが、御殿の面積が手狭なため、表鉄門、長局、備中櫓などの外縁部の建物を御殿の一部に取込んでいるのが特徴である。平成17年3月には本丸の南側に位置する備中櫓が復元された。

元禄10年（1697）、森氏は4代95年間で嗣子なく領国没収となった。

代わって翌元禄11年（1698）徳川家康の次男結城秀康^{ゆうきひでやす}を祖とする越前松平家の松平長矩^{ながのり}（のち宣富^{のぶとみ}）が美作国の内10万石を領して入国した。松平家は以後、9代172年間続いた。越前松平家は、家祖秀康が2代将軍徳川秀忠の兄にあたるため、御家門筆頭のごとき扱いをされていた。それ故に、享保11年（1726）2代藩主浅五郎^{あさごろう}が嗣子もなく夭折^{ようせつ}した際、取り潰しの可能性もあったが、5万石減知のうえ、相続となった。津山藩が10万石に復帰したのは文政元年（1818）のことである。7代斉孝^{なりたか}の養子として将軍家斉^{いえなり}の14子銀之助^{ぎんのすけ}を迎えたことにより加増（領地を増す）されたのである。

津山松平家はその後、領地の異動はあったが、10万石で慶応3年（1867）の大政奉還を迎え、明治2年（1869）に版籍を奉還するのである。

⑥近現代

●「津山市」の沿革

明治4年(1871)7月の廃藩置県により津山「藩」は消滅し、津山「県」に引き継がれた。その4か月後の11月、津山県は周辺地域を統合し、美作国一円は「北条県」となる。



明治22年津山市街図

明治9年(1876)北条県は吸収合併され、岡山県の一部となり、津山は県庁所在地でもなくなった。その後、明治22年(1889)の町村制施行により「津山町」「津山東町」が成立し、津山の地名が復活する。同33年(1900)津山東町は津山町に編入され、旧城下一円が津山町となった。大正12年(1923)、津山町に隣接する地域(現在の津山市林田、野介代、川崎)が「津山東町」となる。昭和4年(1929)津山町と津山東町が合併し、「津山市」は誕生した。その後、合併を繰り返し、平成17年、近隣の加茂町、阿波村、勝北町、久米町を編入し、現在の市域となった。



在りし日の津山城(明治6年頃)

●津山城解体と公園設置

明治6年(1873)の廃城令により取り壊しが決定された津山城は翌年春から同8年3月にかけて石垣を残してすべての建物が解体され、撤去された。資材は売却され、価格は1,700円、その多くは瀬戸内の塩田の燃料にされたという。この時、二の丸四脚門は、美作一宮の中山神社に移築され、

往時の姿を今に伝えることとなる。

明治23年(1890)の本丸北西の腰巻櫓石垣崩壊を契機に、明治24年(1891)2月、津山城跡を公園として整備する趣旨で、鶴山城跡保存会が設立された。城内には国有地、県有地、私有地が混在したが、明治33年(1900)、津山町がすべての土地を公有地化し、鶴山公園が誕生した。

三の丸にある鶴山館は、明治36年(1903)現在地に移築された。元は山下にあった津山藩校の漢学教場で、廃藩後は郡役所や津山高等小学校仮校舎、津山高等女学校仮校舎として利用されていたものを、津山城跡に移築し「鶴山館」としたものである。

● 衆楽園

「衆楽園」は津山藩主森家の2代長継が藩主の時代、明暦年間(1655～1658)に建設されたと考えられている。庭園としての形式は池泉回遊式で、背景の那岐山や泉山といった中国山地の山々との調和が見事と言える。内部は南北に長い池に四つの島が配置され、島と橋によって、庭の景色は三つに分けられている。池の北西にある余芳閣は明暦年間の建築と伝えられる書院造の建物である。この余芳閣に接して明治期の建物を移築した迎賓館があり、池の東側の出島には風月軒という茶室がある。また、珍しい石や樹木が園内各所に配置され、江戸時代の大名庭園の姿を今に伝えている。この公園が「衆楽園」と呼ばれるようになったのは明治に入ってからのことである。明治3年の正月に津山藩最期の藩主松平慶倫が「衆楽園」と揮毫したと言う記録が松平家の『御家務日記』という資料に出てくる。それ以後、「偕楽園」や「津山公園」と呼ばれたときもあったが、大正14年以降、「衆楽園」がこの庭園の名前となり、平成14年、国の指定名勝「旧津山藩別邸庭園(衆楽園)」となった。無料開放され、昔の大名庭園の活動を偲ばせる憩いの場として、年間17万人の観光客や市民が訪れている。



昭和初期衆楽園

● 津山の近代化

1868年、元号が明治となり、西洋に追いつくための改革や産業振興、富国強兵政策が強力に進められた近代化の過程で、本市では、鉄道、教育、医療等、様々な整備が進められた。これらの整備は、これまで形成された城下町の都市構造や文化の上に重なり、また、形成された都市構造や文化を踏まえて周辺に立地するという形で進められた。

近代化遺産は、近代的手法を用いて建造された産業・交通等にかかわる建築物等の総称で、『岡山県の近代化遺産』(平成17年 岡山県教育委員会)としてまとめられている。そのうちから第2章で触れないものを紹介する。

● 知新館

昭和13年(1938)建設、木造平屋建て。第35代内閣総理大臣平沼騏一郎の古希の祝いとして、郷土や法曹の人々がその生家を再現して現在の地に建設し、平沼家に寄贈された。平沼家は代々津山藩士で、騏一郎の父晋は幕末に代官などを勤めている。

おきなばし
翁橋

大正15年(1926)建設、鉄筋コンクリート造。翁橋は出雲往来の藪田川に架かる橋で、江戸時代は茅橋、久蔵橋とも呼ばれていた。橋の四隅に位置する欄干親柱にアールデコ様式が取り入れられている。令和2年(2020)橋の長寿命化工事の試掘で、一部のアスファルトの下から舗道レンガが見つかり、令和3年(2021)の調査ではアスファルト舗装をはがすと、橋全面にレンガが敷き詰められていることが確認された。



建設当初の翁橋



調査で現れた舗道レンガ

●津山市の近現代

明治31年(1898)岡山～津山間を結ぶ中国鉄道が開通し、津山に近代化の波が押し寄せてきた。明治維新以降緩やかであった変化に拍車がかかったともいえる。中国鉄道は当初、現在の津山口駅が終点で、その玄関となった城西地区の繁栄をもたらした。津山駅を降りた乗客は境橋を通過して城西地区に入る。『津山案内記』(明治44年刊)によると明治43年の津山駅乗降客はのべ14万人。当時の津山町の人口1万8千人余りから考えると、相当な人数が城西を訪れたことになる。その後、因美線、姫新線が開通し、津山は山陰・山陽を結ぶ鉄道のジャンクションとなった。



水道敷設を評した地元の新聞
(津山朝日新聞 昭和24年9月7日)

昭和4年(1929)津山城下町とその周辺部により「津山市」が成立した。成立当初の人口は33,361人、面積は38.5km²であった。当初、旧津山町役場を庁舎としていたが、昭和8年(1933)に新市庁舎(現津山郷土博物館)が完成し、いよいよ津山市政が本格的にスタートした。同年上水道の給水が開始された。水道敷設は市となる以前から計画されており、総工費74万円。その後の情勢を考えると、この時期でなければ実施できなかったともいわれ、英断と評されている。第2次世界大戦は津山にも影響を与えた。空襲による被害はなかったが、津山繁華街の象徴であった商店街のアーケ



供出前の二宮松原

ードの鉄柱や、江戸時代から続く往来沿いの松並木が軍需物資として供出され、昭和11年の内国勸業大博覧会で津山城跡に建設された再建天守は、攻撃の目標になるとして取り壊された。戦争が終わり数年たつと、様々な生活用品の統制が解除され、津山でも商業が復活した。

昭和28年(1953)には、再び商店街にアーケードが架けられ、賑わいを取り戻してくる。しかし、昭和30年代から昭和40年代後半の高度成長期が終わりを迎えると、活況にも陰りが見え始める。そのうえ、折しもモータリゼーションの発達や、昭和50年の中国自動車道の開通などにより都市機能の郊外移転が進み、城下町全体の空洞化が進行した。城下町周辺部に大規模な店舗が増えることにより、商店街の集客力も低下していった。また、周辺部の開発が進み、中心部の人口は低下し、急速に高齢化が進むことになった。



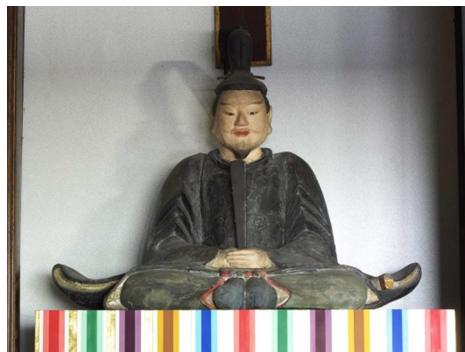
昭和40年代の商店街

近年は「城東むかし町」(平成2年開始)、や「城西まるごと博物館」(平成7年開始)などのイベントを通して、かつての賑わいを取り戻そうとする試みがみられるようになる。さらに平成25年(2013)8月に城東地区が、令和2年(2020)12月に城西地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その動きに拍車がかかった。それらの効果は一進一退を繰り返しながらも徐々に表れており、津山城下町は未来に向けて新しい一歩を踏み出している。

(2) 津山の歴史的風致形成に関わりのある人物

森 ^{ただまさ} 忠政 (1570~1634)

津山藩初代藩主。美濃国（現在の岐阜県可児市兼山）の金山城主森可成^{よしなり}の六男として生まれた。天正12年（1584）兄の長可^{ながよし}が小牧・長久手^{ながくて}の戦いで戦死したため、家督を継いだ。関ヶ原の戦いの後、慶長8年（1603）美作国を拝領し、18万6千5百石の領主となる。翌年から津山城の普請と同時に城下町建設を開始し、城下町津山の基礎を築いた。



森 ^{ながつぐ} 長継 (1610~1698)

津山藩2代藩主。父は森家重臣関民部成次^{せきみんぶなりつぐ}、母は忠政の三女お郷。寛永11年（1634）忠政の養子となる。総社宮本殿の修理、高野神社社殿の再建、徳守神社社殿の再建、鶴山八幡宮社殿の再建、本光寺仏殿の建立など領内の社寺の再建、修理を行った。また、長継の治世において旧津山藩別邸庭園（衆楽園）の前身となる「北御屋敷」が整備されたと考えられる。

廣瀬 ^{たいざん} 臺山 (1751~1813)

津山藩士。大坂勤めの際、文人画池大雅^{いけのたいが}の高弟である福原五岳^{ふくはらごがく}に絵を習う。江戸で藩主や重臣の御手跡指南をするかたわら、多くの文人と交流し、中国の伝統的な文人画にすべてをかけ、独自の気品と格調を表現した。

くわがた ^{けいさい} 鋤形 蕙斎 (1764~1824)

津山松平藩御用絵師。江戸各地の名所図、黄表紙、挿絵など作品を多数描き、当時の江戸において最も人気を得た浮世絵師だった。身近な動植物や人物、衣食住のありさまを描いた「^{りやくがしき}略画式」は初心者の手引書として普及。また、近世期の職人、職種を描いた「^{きんせいしよくにんつくしえことば}近世職人尽絵詞」は松平定信^{さだのぶ}の求めに応じて製作された。代表作の「江戸一目図」屏風は、六曲一隻の屏風で、手前に隅田川を配して遠くに富士山を望みながら、江戸の町が細部にわたって描かれている。航空撮影しかたのようなリアルな作品で、いまなお高い評価を得ており、東京スカイツリー建設において屏風と同じ眺望となるよう建設地決定にあたって大きく影響したといわれている。

う だ が わ げん ずい
宇田川 玄随 (1755~1797)

津山藩医。漢方医だったが、桂川甫周かつらがわ ほしゅうや大槻玄沢おおつきげんたくから西洋医学の正確さを教わり25歳の時に蘭方医に転向。大槻玄沢について蘭学を修めた。桂川甫周のすすめに従ってオランダの医者ゴルテルかんめい ないかしよの『簡明内科書』を10年かけて翻訳し、日本初の西洋内科学書『西説内科撰要』を著した。



う だ が わ げん しん
宇田川 玄真 (1769~1834)

津山藩医。玄随の養子。江戸で大槻玄沢・宇田川玄随・桂川甫周などについて蘭学を学ぶ。稲村三伯いなむらさんぱくを手伝い日本初の蘭日辞書『ハルマ和解』の編さんわ げに従事。西洋の解剖学や病理学、生理学まで紹介した『医範提綱』や、薬学書『和蘭薬鏡』『遠西医方名物考』などを著して、知識の普及に努めた。



う だ が わ よう あん
宇田川 榕菴 (1798~1846)

宇田川玄真の養子。馬場貞由さだよしらについてオランダ語を学ぶ。日本初の本格的植物学書『植学啓原』しょくがくけいげんや日本初の本格的な化学書『舎密開宗』せいみかいそうを著し、近代科学の確立に大きな功績をあげた。さらに、オランダの地理や歴史、西洋の度量衡どりょうこうの解説書や西洋音楽理論書、コーヒーについてまで、幅広い分野にわたって研究。シーボルトとも交流があった。



また、「細胞」「繊維」「酸素」「水素」「酸化」「還元」「温度」「圧力」などの植物・化学用語を造語した。「珈琲」の当て字は榕菴が考案したと言われている。

みつくり げん ぽ
箕作 阮甫 (1799~1863)

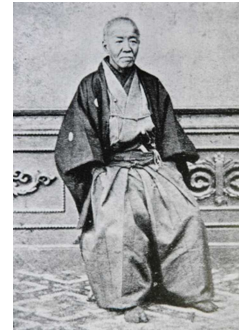
津山藩医。文政6年(1823)藩主の参勤交代の折、蘭学者の宇田川玄真う だ が わ げん しんに入門。医学や語学、地理学など多くのオランダ語の翻訳を行った。その語学力と知識が幕府に認められ、41歳で「蕃書和解御用」に出役を命じられた。嘉永6年(1853)アメリカ合衆国使節ペリー来航時に、大統領の親書の翻訳にあたるなど活躍した。また、ロシア使節プチャーチンの来航時にも外交文書の翻訳や交渉に参加した。その後、



「蕃書調所」の初代筆頭教授となった。子孫に箕作秋坪、菊池大麓だいろく等がいる。

松平 齊民 (1814~1891)

津山藩 8代藩主。号は「確堂」。11代将軍徳川家斉の子。津山藩主松平齊孝の養子となり家督を継いだ。将軍家に近い立場から「越前松平家」の格式に見合う加増を幕府に要求し、領地替えによって小豆島を獲得した。城下町商業の発展に努め、町人のだんじり文化へ理解を示した。また、幕末期に徳川一門の重鎮として混乱收拾に尽力した。



植原 六郎左衛門 (1816~1868)

津山藩士。剣術、砲術を学ぶ。遊泳のみならず、武術としての操船、水馬、渡河等実戦を重んじる「神伝流水練」を習得し、神伝流の指導者となる。江戸勤めの際、津山藩士のみならず他藩の藩士の砲術、水練も指導を行ったため、「神伝流」は全国に広まった。ペリー来航後は、海防警備のため小豆島で砲術演習を実施し、大砲の製造も行った。

津田 真道 (1829~1903)

嘉永3年(1850)江戸で箕作阮甫、伊東玄朴について蘭学を学ぶ。また、佐久間象山から兵学を学んだ。その後、蕃書調所教授手伝に登用され、文久2年(1862)オランダへ留学。明治維新の後、判事となる。また、「明六社」の結成に参画し、日本の近代市民思想の啓発にも尽力した。勅撰議員となり第1回帝国議会が開かれた時は初代衆議院副議長となった。



仁木 永祐 (1830~1902)

嘉永元年(1848)江戸で箕作阮甫、宇田川興齋から蘭学を学ぶ。アメリカやロシア使節の来航により社会状況が騒然とするなか、若者育成のため私塾^{もみやまこう}
山巒を開いた。明治維新の後、学校を焼き払おうとした一揆を阻止するなど教育の大切さを訴えた。また、自由民権運動が高まると立石岐等とともに国会開設運動に奔走し、「美作の板垣退助」と呼ばれた。



鞍懸 寅二郎 (1834~1871)

津山松平藩士、勤王家。播州赤穂(現兵庫県赤穂市)に生まれる。勘定奉行に抜擢されるが、翌年罷免された。江戸で塩谷岩陰の門下で儒学研鑽に努めた後、文久2年(1862)津山藩士となった。京都、江戸で尊王攘夷派志士と交わる。当時津山藩領



であった小豆島で起きたイギリスによる島民死亡事件の解決に奔走。また、津山で発生した大規模な一揆（津山藩改政一揆）で一揆勢の説得に成功した。その後、大目付に就任し、藩庁を主導した。明治維新後は、新政府に出仕し、津山藩権大参事となったが、明治4年（1871）暗殺された。

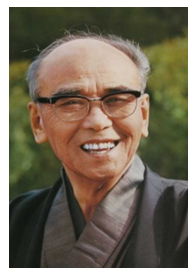
平沼 騏一郎 (1867~1952)

津山市南新座に生まれる。大逆事件、シーメンス事件など検事総長、司法大臣として司法関係で活躍した。昭和14年（1939）近衛内閣の総辞職をうけ、内閣総理大臣となる。

米穀配給統制法、国民徴用令を制定するなど戦時体制へ移行するなか、突如締結された独ソ不可侵条約によって総辞職することになった。津山市南新座にある「知新館」は古稀のお祝いに法曹界が中心となって再建したものである。

内田 鶴雲 (1898~1978)

書道家。鶴雲の号は通信教育などで指導を受けた丹羽海鶴、伊原雲涯から一字ずつ取ってつけられたもの。明治31年（1898）岡山県勝田郡勝北町新野（現津山市新野東）に生まれた。大原桂南、丹羽海鶴、伊原雲涯らに師事。流麗な平安朝かなに漢字の線を加えた独特の書風を作り、代表作として「水の変態」等がある。



西東 三鬼 (1900~1962)

津山市南新座に生まれる。歯科医時代に患者に誘われて俳句を始めた。俳号の「三鬼」はサンキューのもじりと言われている。昭和11年、「水枕ガバリと寒い海がある」を発表。その鋭い感覚が俳壇を騒然とさせ、新興俳句の旗手として注目された。

終戦後、同志と現代俳句協会を創設、昭和23年、山口誓子を擁して俳誌「天狼」創刊した。命日の4月1日は歳時記の西東忌、三鬼忌となった。

4. 文化財等の分布状況

津山市の指定等文化財は、国指定等 34 件、県指定 36 件、市指定 156 件となっている。

津山市内の指定等文化財件数

種 別		国			県指定	市指定	計	
分 類	細 別	指 定	選 定	登 録				
有 形 文 化 財	建 造 物	6		12	10	25	53	
	美 術 工 芸 品	絵 画				2	7	9
		彫 刻	2				8	10
		工 芸 品	2			3	5	10
		古 文 書				1	9	10
		考 古 資 料				3	7	10
		歴 史 資 料				1	6	7
無 形 文 化 財				4	0	4		
民 俗 文 化 財	有 形 民 俗 文 化 財	1			1	5	7	
	無 形 民 俗 文 化 財				3		3	
記 念 物	史 跡	6			7	54	67	
	名 勝	1		1		1	3	
	天 然 記 念 物	1			1	29	31	
文 化 的 景 観								
伝 統 的 建 造 物 群			2				2	
計		19	2	13	36	156	226	

指定文化財等の状況

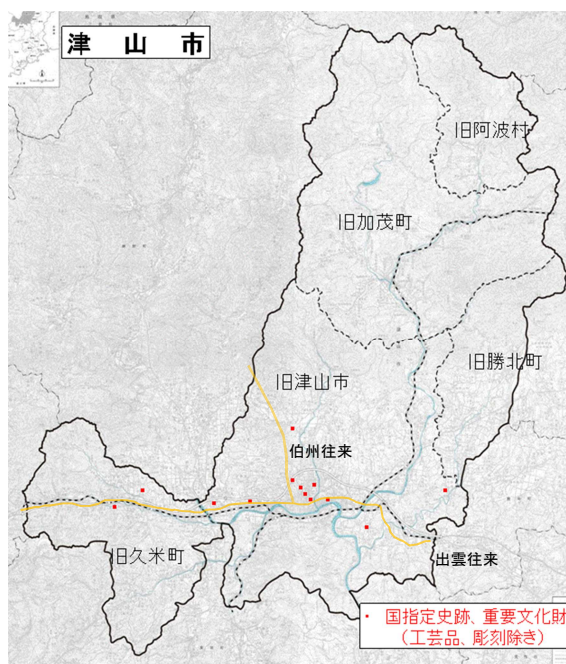
津山市の国の重要文化財は、旧出雲往来沿いの旧津山市に 17 件、旧久米町に 2 件の計 19 件が存在する。

旧津山市にある史跡津山城跡や名勝旧津山藩別邸庭園（衆樂園）は、城下町津山を象徴するものであり、広く市民に親しまれている。

城東地区の旧出雲往来に面する史跡箕作阮甫旧宅は、江戸時代後期から幕末にかけて日本の近代化を支えた津山の洋学者を代表する箕作阮甫の生家である。伝統的建造物群保存地区として一帯の町並み保存に努めるとともに旧出雲往来の無電柱化等、歴史的風致の向上に重点的に取り組んでいる。

中山神社本殿・総社本殿・鶴山八幡宮本殿・岡山県立津山高等学校（旧岡山県津山中学校）本館はともに城下町から北にのびる旧伯州往来沿いに位置する国の重要文化財建造物であり、城東地区には旧苅田家住宅、城西地区には森家の菩提寺である本源寺がある。

旧伯州往来沿いには、県の重要有形民俗文化財である津山だんじりの保管庫も存在する。なお、旧津山市内には、国の登録有形文化財が 11 件と登録記念物が 1 件登録されており、このうち 11 件が旧城下町エリアに存在する。また、津山市城西伝統的建造物群保存地区が令和 2 年（2020）12 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことにより、津山市の重要伝統的建造物群保存地区は 2 件となっている。



国指定文化財位置図

国指定等文化財

建造物 6 件、美術工芸品 4 件、有形民俗文化財 1 件、史跡 6 件、名勝 1 件、天然記念物 1 件の指定文化財が所在するほか、重要伝統的建造物群保存地区 2 地区、登録有形文化財 11 件、登録記念物 1 件が所在する。主な文化財の概要は以下のとおり。

(1) 有形文化財

● 旧 荻田家 住宅 (建造物)

旧津山城下の商家町である津山市城東伝統的建造物群保存地区の西部に所在し、江戸時代中期に当地で酒造業を始め、江戸時代末期に城下屈指の本店となり、周囲の敷地を取り込みつつ主屋の増築や土蔵群の整備がなされた。

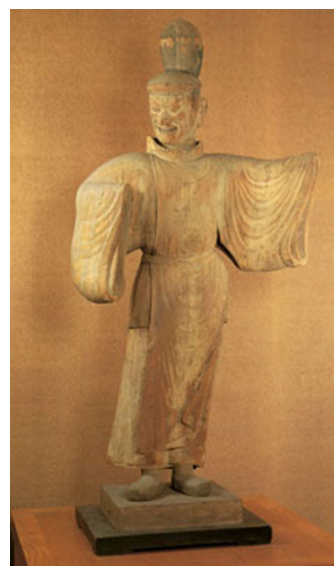
主屋の海鼠壁なまこかべを用いた外観構成などが当地方における町屋建築の典型を示すとともに、屋敷構えも江戸時代以降継続して営んだ酒造業の繁栄とともに発展した過程を示しており、当地方を代表する商家の住宅として歴史的価値が高い。



旧荻田家住宅

● 木造隨身立像 (彫刻)

高野神社隨身門ずいじんもんの両脇に侍立していた神像で、阿形・吽形あぎょう うんぎょうの 2 軀からなる。両者ともヒノキ材で彩色をほどこす。ただし現状では彩色がほとんど剥落している。両像の腹部より腰下にかけての内面に墨書銘が記されている。これによれば、本像は平安時代末期の応保 2 年 (1162) 直司漆間尋清うる まひろきよ以下が勧進となり、仏師筑後講師 巖成によって製作されたことがわかる。



木造隨身立像

●^{たち}太刀 ^{めいくにゆき}銘国行（工芸品）

刃長 69.9 cm、反り 2.4 cm。太刀姿は重ねがやや薄く、身幅は細いが反りが高く堂々たるもので、2字銘「国行」が刻まれている。

国行は鎌倉時代中期の刀工で山城国来派の祖である。銘はすべて国行の2字のみで年紀作品はない。本太刀は宝永7年（1710）江戸幕府第6代将軍徳川家宣から津山松平藩初代藩主松平宣富に下賜され、明治初年、同9代藩主松平慶倫が作楽神社に奉納したものである。



銘国行

（2）民俗文化財

●^{たのくま}田熊の^{ぶたい}舞台（有形の民俗文化財）

舞台は田熊八幡神社社殿の南東に位置し、拝殿前の広場に面している。舞台の建物は、桁行6間（11.05m）、梁間3.5間（6.8m）の大きなもので、単層、^{さんかわらぶき}棧瓦葺、^{いりも}入母屋造である。舞台上手の一段高い位置には太夫座が作り付けになっており、舞台中央には直径4mの皿回し式の回り舞台が設けられている。舞台の背景の壁は大きくくり抜かれて窓になり、遠くの山々を



田熊の舞台

舞台背景として利用している。一方、^{ならく}奈落にも数カ所に窓が明けられ、こちらは外光による奈落の明かり取りとなっている。また、舞台が神社拝殿の斜め前に位置することから、拝殿を巧みに利用して、拝殿と舞台下手を渡り廊下で結んで花道がしつらえられている。舞台の建築年代に関しては、『田熊八幡神社重要書綴』から明治4年（1871）の建築であることが知られる。

(3) 記念物

●^{ほんだに}本谷のトラフダケ自生地(天然記念物)

トラフダケ(虎斑竹)は、高さ3～5m、太さ1cm程度のヤシヤダケ(夜叉竹)の稈に虎斑菌が寄生し、黒褐色を呈する円形あるいは楕円形の斑紋が表れたものを指す。発生する斑紋の大きさは稈の太さによって異なり一定しないが、長さ10～60mm程度、巾7～50mm程度のもので、太い稈には比較的大きな斑紋が発生する。本市の自生地は、約8a程度の範囲において自生している。



トラフダケ

(4) 伝統的建造物群

●^{つやましじょうとうでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく}津山市城東伝統的建造物群保存地区

津山市城東伝統的建造物群保存地区は、城下町の町人地として出雲往来沿いに発展した町並みで、江戸時代初期に形成された地割がよく残っている。出雲往来に面して、江戸時代の町家を主体として昭和戦前期までに建築された主屋は、切妻、平入りを基本とした2階建てとし、出格子窓、虫籠窓、なまこ壁、袖壁を使用した優れた意匠の伝統的建造物が建ち並び、城下町に形成された商家町の歴史的風致をよく伝えている。



津山市城東伝統的建造物群保存地区

つやましじょうさいでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく
●津山市城西伝統的建造物群保存地区

津山市城西伝統的建造物群保存地区は、城跡西側の社寺地・町人地であり、慶長9年（1604）の城下町建設開始以降から18世紀初頭にかけて段階的に形成された城下町の地割を良く残している。

社寺地には、城下町建設開始以降、約半世紀の間に24に及ぶ寺院が形成され、その建造物群は現在までよく遺存しており、国の重要文化財に指

定された本源寺本堂等をはじめ、各々の文化財としての価値も非常に高い。

また、当該地区を貫く出雲往来沿いの町人地は、江戸時代以来高瀬舟による物流で栄え、明治31年（1898）に中国鉄道が開通したときには、現在のJR津山口駅が終点の「津山駅」であったことから、当時の津山の玄関口として発展し、商人や職人の町として大いに栄え、作州民芸館等、明治・大正期を中心とした近代化遺産や商家などの建造物群が現在まで良好な状態で数多く残っている。



津山市城西伝統的建造物群保存地区

（5）登録有形文化財

じょうとう まちや
●城東むかし町家（建造物）

江戸時代の有数の商家・旧梶村邸を津山市が整備し一般公開している。

江戸時代末期の建築物の面影を残す主屋、明治初期の居住空間である付属屋、大正時代の洗練された技術や技法を知ることができる座敷、東蔵、洋館等がかつての面影を今に伝えている。



城東むかし町家

県指定文化財

県指定文化財は、建造物 9 件、美術工芸品 9 件、無形文化財 4 件、有形の民俗文化財 1 件、無形の民俗文化財 3 件、遺跡 7 件、植物 1 件の 34 件がある。主な文化財の概要は以下のとおり。

(1) 有形文化財

●^{とくもりじんじゃしゃでん}徳守神社社殿（建造物）

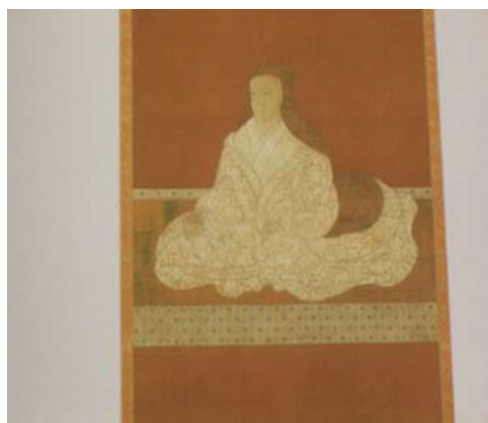
天文 8 年（1529）に焼失したが、慶長 9 年（1604）春、森忠政が築城に先立ち、津山の鎮守として徳守神社を再建、同年内に落成して遷宮され、新田村において 70 石の社領を寄附された。2 代藩主森長継は寛永 14 年（1637）さらに 10 石を加増し、寛文 4 年（1664）に社殿を新築した。現在の本殿・釣殿・拝殿がこれにあたる。



徳守神社社殿

●^{みょうこうにがぞう}妙向尼画像 ^{つけたり}附 ^{みょうこうにしょうそく}妙向尼消息（絵画）

織田信長配下の武将森可成の妻であり、鬼武蔵と称された武蔵守長可^{ながよし}、天正 10 年（1582）6 月に本能寺において織田信長とともに壮絶な最期を遂げた蘭丸、徳川家康の下で美作国主となった忠政などの母である妙向尼の画像である。上畳に座した妙向尼を描いたもので、頭布は緑青を用い、衣装は淡い色調で描かれるが、いたるところに胡粉^{こふん}の盛り上がりによる文様が施されている。表情は穏やかであるが口元には秘めた強い意志が感じられる。



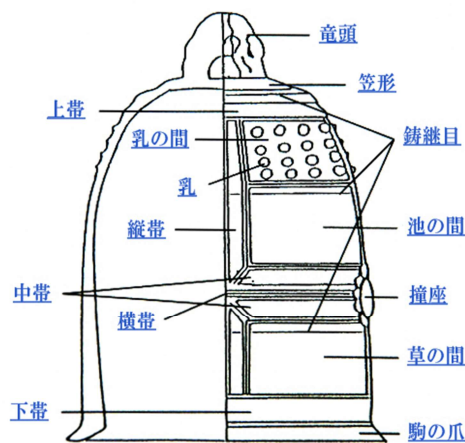
妙向尼画像

● **梵鐘（工芸品）**

安国寺にある梵鐘で、竜頭は双竜式で彫りも深く迫力がある。鐘身上部の乳の間に小さく古風な葺形の乳を配列し、池の間四区に銘文が刻まれている。銘文によると、永和3年（1377）に久米南条郡長岡（現、津山市金屋）の鑄物師百済源次によって、「作州高倉県」（現、津山市下高倉付近）の寄松山多聞寺の梵鐘として製作されたものである。その後の経緯は不明であるが、追銘によれば、延享2年（1746）に下高倉の畑の土中から発見され、小田中村の善福寺に寄進されたことが判明する。



梵鐘



● **津山藩松平家文書（古文書）**

本文書は、美作国津山藩主であった松平家に伝来した文書のうち、元禄11年（1698）から明治4年（1871）までの津山藩の藩政に関わる文書を中心にしたもので、5,399件（7,151点）を数える。廃藩置県以後、藩政文書を含む文書・記録・書籍類は、津山の松平家事務所倉庫及び東京の松平邸に保管されていたが、昭和34年に津山市に寄付された。



津山藩松平家文書

津山藩松平家文書の藩政文書には、藩士の勤書、領内の田畑山林名寄帳、日記類、支配の手引書である御定書、絵図類がある。中でも2,000冊を超える日記類には、津山城内の御用所で作成された国元日記、江戸藩邸で作成された江戸日記、藩主の日常の様子などを記した小納戸日記、町奉行日記、郡代日記、勘定奉行日記などがある。

やなぎたにこふんしゆつどいぶつ
●柳谷古墳出土遺物（考古資料）

柳谷古墳は、幅約0.8m、推定長3.3mの横穴式石室をもつ径7mの円墳である。昭和62年の発掘調査により、須恵器、土師器、鉄鏃、銀環、須恵器大甕等が出土した。ことに閉塞部付近から出土した鉄製の銀象嵌頭椎大刀把頭・銀象嵌鞘尾金具は、全面に銀象嵌を施したもので、頭椎大刀把頭には、花卉や亀甲型に配された2重同心円文が、鞘尾金具には「U」字文及び「I」字棒状文が施されており、この類例は全国的にも十数列しかなく、貴重な考古資料である。



柳谷古墳出土遺物

おおみやりくまげやりさやつき つけたり くるくまげさや
●大身槍熊毛槍鞘付 附 黒熊毛鞘（歴史資料）

大身槍は、津山藩主松平家が参勤交代行列に使用したものであり、「大熊御槍」と称された津山藩を識別する独特の目印となった。文化14年（1817）の新藩主初入国の様子を描いた『拾萬石御加増後初御入国御供立之図』（津山郷土博物館蔵）中にもみえる。槍と鞘の製作年代は、文化～弘化年間であり、江戸時代後期における津山藩関係資料として貴重である。



大身槍

(2) 無形文化財

●^{しんでんりゅうこしきえいほう}神伝流古式泳法

神伝流古式泳法は、古式泳法の一つで、愛媛県大洲市を発祥地とし、天保5年(1834)津山藩で正式に採用された。泳法は、^{あおりあし}煽足・^{やぐらわざ}沈み体で、櫓業など50余種類があり、実用的泳法の技術と技法が現在によく傳承され、その様式美も高く評価されている。



^{がんこう もろて おうぎ}
神伝流古式泳法(雁行、諸手、扇)

●木工芸

小椋芳之氏は、昭和22(1947)年に津山市鉄砲町で木地師の家系小椋六助の長男として生まれ、父に師事し木地師及び塗師の技術を学んだ。小椋家は、代々、鏡野町羽出に居住した千軒木地師であり、芳之氏は、^{せんげん}数少ない技術継承者で、高度な技術を有している。



木目を活かした盆や器などの作品の製作

^{かんな}匏を巧みに使って挽いた木地を入念な拭漆で仕上げ、美しい曲線をもつ木目を生かした上品な作品を製作している。

(3) 民俗文化財

●津山だんじり(有形の民俗文化財)

城下町津山では徳守神社の秋の祭礼行事として、^{みこし}氏子が神輿をかき、戸川町は^{ざるたひこのみこと}猿田彦命に擬して先駆けを務め、その他は各町ごとに趣向をこらした「練物」を出して加わるのが慶長以後の慣例であった。徳守神社が城下町の総鎮守として再興されて以来の行事であったことがわかっている。現在、10月の祭礼は町の活性化や観光開発の意味をこめたイベント「津山まつり」として、個々の神社・町内だけでなく行政や商工会議所も協力する形で実施されており、文化財指定の「だんじり」以外に新たに作られた「かざり山車」も出動するなど、



津山だんじり

伝統的な文化の保存と現代的なイベントの実施とうまく両立させるべく、
努力が重ねられている。

●^{たかたじんじゃ ししまい}高田神社の獅子舞（無形の民俗文化財）

毎年10月第2日曜日に行われる高田神社の秋祭りにおいて舞われている。高田神社は、大正2年（1913）近郊五社が合併したもので、元は久保神社にて行われていた。雌雄の獅子に青年が各12人ずつ入り、向かい合って闘争する勇壮な舞である。伴奏は、横笛8人と太鼓4人で行う。



高田神社の獅子舞

（4）記念物

●^{ぬまいせき}沼遺跡（史跡）

沼遺跡は、尾根上に位置する弥生時代中期から後期前半の集落遺跡である。昭和27（1952）年から昭和33（1958）年にかけて、5次にわたる発掘調査が行われた。遺跡は、遺跡中央の道路を挟んで東西に大きく区分され、東地区では掘立柱建物3棟と南北方向に走る溝が、西地区では竪穴住居5棟、長方形竪穴遺構1基、土坑1基が確認された。また、出土遺物としては、弥生土器、石器、鉄器、ガラス小玉が出土した。沼遺跡は、ほぼ一つの集落全体が発掘調査されたことから、集落の構造と規模、空間利用の実態が初めて把握された。



沼遺跡

昭和30（1955）年には現地に竪穴住居が復元され、歴史学習のための史跡公園として整備された。

市指定文化財

市指定文化財は、建造物25件、美術工芸品42件、有形民俗文化財5件、史跡55件、名勝1件、天然記念物29件の157件がある。主な文化財の概要は以下のとおり。

（1）有形文化財

おおすみじんじゃしょうとくかん きゅうつやまだん しじんじょうこうとうしょうがっこうこうどう
●大隅神社 昭徳館 (旧津山男子尋常高等小学校講堂) (建造物)

昭徳館は明治36年(1903)、津山男子尋常高等小学校の講堂として建てられ、昭和3年(1928)に現在地に移転された。建物は10間(1間=約1.8m)×8間の規模で、中央に柱のない当時では珍しい大型建物であった。東側は間口2間の玄関に式台が設けられ、上部には暈1暈大の平沼淑郎揮毫による「昭徳館」の額が掲げられている。昭徳館は、明治末期という時代の変遷期の建物の様子を今に伝えるもので、この種の構造および規模の建物は現在では貴重なものとなっている。



昭徳館

おおすみじんじゃ もくぞう し しこまいぬ
●大隅神社の木造獅子狛犬 (彫刻)

獅子(阿形)は、首を左(参拝者の方向)にひねりやや上向きに大きく口を開けている。高さ29.5 cm、前後(鼻~尻)33.0 cm、幅16.0 cm。

狛犬(吡形)は、獅子に相対するように首を右(参拝者の方向)にひねっている。高さ30.5 cm、前後(鼻~尻)37.0 cm、幅14.0 cm。



獅子(右)と狛犬(左)

獅子・狛犬ともにヒノキ材の一木造で、各所に下地である白土が残ることから、もとは彩色があったと考えられ、四肢、尾、耳などの細部が失われているが、制作年代は1500年代から1600年代の初頭にかけてと推測される。

うだわようあんじひつしりょう
●宇田川榕菴自筆資料 (歴史資料)

江戸時代中期以降、津山藩は江戸詰の藩医を中心に優れた蘭学(洋学)者を輩出した。津山藩に初めて蘭学をもたらした宇田川玄随、その跡を継いだのが玄真、そして玄真の養子が榕菴である。榕菴は、日本初の西洋植物学書『植学啓原』や日本初の化学書『舎密開宗』を刊行し、日



植学啓原図

本における近代科学の確立に大きな功績を残した。

本資料（18 件 82 点）は、津山洋学資料館が寄贈や購入によって収集した宇田川榕菴の自筆及び旧蔵資料である。「宇氏秘笈」「オランダカルタ」などはヨーロッパ文化への高い関心を示し、いずれも榕菴の幅広い好奇心を伝えるものであり、榕菴研究において貴重な資料群である。

（2）民俗文化財

●中山神社の太鼓（有形の民俗文化財）

この太鼓は櫟の一木造りで、直径 60 cm、長さ 41.5 cm、重さ約 17.6 kg。胴の内面に 6 種類の紀年銘のある墨書がみられ、最古のものは嘉慶 2 年（1388）、大篠の材木を用いて製作されたことが記されている。その後の紀年銘はいずれも江戸時代のもので、寛文から文政まで少なくとも 5 回の修復のあったことがわかる。また、年代ごとに太鼓職人の集住地であった京都や大坂の地名や太鼓職人の名前がみられ、張替えの変遷を詳細に伺い知ることができる。



中山神社の太鼓

（3）記念物

●大隅神社境内（史跡）

大隅神社は、当初は現在地から 900m 東方にあったが、元和 6 年（1620）、津山藩主森忠政が津山城の鬼門守護神として丹後山の東端にあたる現在地に移転した。現在の本殿は、貞享 3 年（1686）、第 4 代藩主森長成により建立されたもので、境内には、市指定重要文化財である本殿、神門、昭徳館のほか、玉垣、石灯籠、狛犬、手水鉢、幟立石などがある。



大隅神社の境内

玉垣は、最も古いもので安政 3 年（1856）のものがあり、市内にある神社の中では最も古く、幕末から明治初期にかけてのものがまとまった状態で保存されている。また、境内にあるその他の石造物（石灯籠、狛犬、手

水鉢、幟立石) についても、元禄から明治までの神社の変遷を示すものとして貴重なものである。

●^{あかし やぶち}明石屋淵船着場の常夜灯 (史跡)

安岡町の吉井川沿いにある常夜灯で、かつて吉井川で往来した高瀬舟の安全を祈願して文化15年(1818)に建立され、現存する中では市内最古。明石屋淵は城下町で3カ所あった船着場の一つで、唯一現存する史跡となっている。



明石屋淵船着場の常夜灯

●^{せきりんえん}石林園 (名勝)

石林園は、安国寺にある近世中期に築造された禅宗庭園。「石林園記」によれば、二世^{れつどうおしょう}列堂和尚の築庭と伝えられている。現在の安国寺は臨済宗の寺院で、境内の広さは約8,500 m²、このうち庭園が約5,900 m²を占めている。庭園は、本堂及び客殿の背後の丘の傾斜を取り入れて築庭されており、泉と奇岩が自然の山腹の様々な樹種を背景に巧みに配置され、座敷からの鑑賞と回遊を兼ねた趣のある庭に仕上がっている。



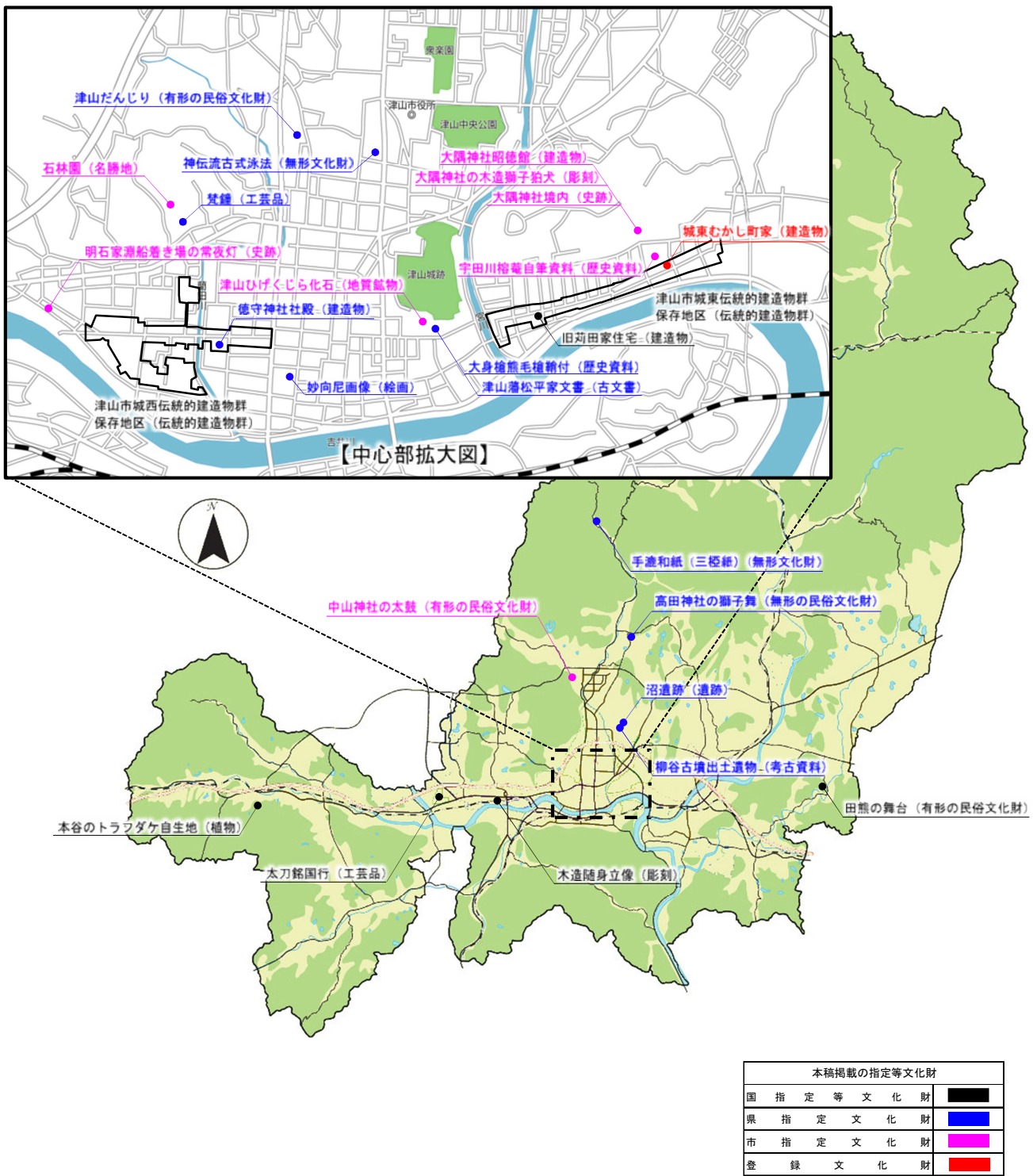
石林園

●津山ひげくじら化石 (地質鉱物)

昭和37年8月、津山市の中学生が、津山市二宮西松原の吉井川鉄橋下流約100mの川底に動物の化石が埋もれているのを発見した。同年11月、津山市教育委員会が東京大学、広島大学、岡山大学、国立科学博物館、地質研究所らの研究者の協力を得て発掘調査を実施した。北岸から出土した1号化石は長さ5.5m、南岸から出土した2号化石は長さ6.5mで、^{とうこつ がっこつ けいこつ}頭骨、顎骨、頸骨、^{ついきつ ろっこつ びこつ}椎骨、肋骨、尾骨等からなり、哺乳類のヒゲクジラと判明した。化石包含層の年代は約1,500万年前に遡る。



ひげくじら化石



本稿掲載の指定等文化財の分布状況

指定文化財・登録文化財以外の主な文化財

(1) 岡山県近代化遺産

●旧津山扇形機関車庫

昭和11年(1936年)建築。当機関車庫は、現存する岡山県下で唯一の機関車庫である。奥行22.1m、17線の扇形車庫である。現在は一部に排水処理施設等が設置され、10線になっている。外周部は角柱、内部の二列の独立柱は円柱、陸屋根はフラットスラブ構造で梁を抜いている。当初の姿をよく留めており、質実な空間を持つ機関車庫として希少性が高い。



扇形機関車庫と転車台

●転車台

当機関車庫の建築以前に設けられていたと思われる昭和5年に製作された直径18.28mの転車台がある。

(2) 津山の伝統工芸品・民芸品

●津山ねり天神

おひな様の祝いや書道上達、学問成就、試験合格などを祈願する土をこねて作った素朴な天神様。

美作地方では、古くから男子の誕生を祝い天神様を祭る民俗行事があり、菅家七流の一つ植月家^{うえつき}では、6代目伊右衛門(1742~1802)が土練りの天神を作り配布していた。7代目の清六^{せいろく}の代に京町に屋号・栢屋^{かしわや}と称し泥天神の製造販売を本業とし、以来津山天神の基礎が出来上がった。

この由緒ある津山ねり天神は岡山県知事指定(県指定)郷土伝統的工芸品になっている。



津山ねり天神

●津山土鈴

津山地域の土をいかし、土鈴の技術を引き継ぐ民芸鈴。津山の土鈴は、森忠政がお国入りの際、行列の先頭でヤリ持ちをした奴を模して作られたといわれる。弥生式住居鈴、銅鐸鈴、作楽神社御鈴、鍋土鈴等の社寺の授与鈴や観光土産の土鈴があり、そのほかに、奴鈴、桃太郎鈴等の趣味の土鈴等々、200種類余りの品数がある。



津山土鈴

●ましくゅうし作州牛

津山は古くから竹細工の伝統をもち、かつて九州大分と勢力を二分する竹細工の産地であった。その中で、唯一民芸玩具を創って伝統を守っているのが田町の津山民芸社である。

山間地で育った良質の和牛作州牛をデザインした単純で美しく、竹材の特質を生かした玩具である。昭和天皇が昭和37年に岡山国体に来訪された際、現皇太子様のお土産に購入されたり、年賀切手のデザインにも採用された。



作州牛

●かくざんぼり 鶴山彫・かくじょうぼり 鶴城彫

作州津山は、工芸においても優れた工匠を多く輩出した。松平侯お抱えつばし鑿師なかがわかつづぐの中川勝継、その子しょうあみの正阿弥勝義は有名で、その流れをくむ在津彫師が、木彫に伝統の味を活かした木工芸品として、鶴山彫と鶴城彫がある。鶴山彫は、中国山地に多いトチ材を使った盆に刀の鑿等の文様を彫刻し、漆を何層にも薄く重ね塗りする洋画のグラッシ技法を漆に導入した味わいある漆器である。

鶴城彫は、中国山地に多く産するトチやケヤキ材を用い、自然の木目を生かしながら手彫りの彫刻をほどこした工芸品である。



鶴山彫



鶴城彫